

市 2
4329
1-3

軒子曰
卷之三

文偉行
教道者道之所被
方之洲萬有之興
與馬乃吾友氣吹生風
論之奧此猶也其人中之
林之聖子

門
號
4329
卷
1

神字日文傳序

卷之二
故昌黎氏
書于
年月

我道者。道之所以為道之道。而四方之洲。萬有之嶼。所以為道者。不與焉。乃吾友氣吹舍平篤胤。既能論之矣。蓋此翁也。其人中之神。學林之聖乎。其奇說精考。沸々涌出。

一採筆則萬言如流。讀其所著。古史徵與傳而可知也。此道也。嚮者有縣居鈴屋兩夫子。而高唱遠攷。使人蹈其軌轍焉。其功其偉哉。雖然比諸吾翁。則猶未免乎漏真遺粹也。豈不可畏乎。翁邇者著神字

日文傳。需序於余。受而讀之。不堪愉快。掩悵之至。昔嘗有志於斯。而未成焉。然而吾友之有此舉。使余嘆美其為先鋒。而能破其疑陳焉。其功亦偉哉。蓋其為書也。據古書舊說。而知必當有神字。據太兆

之有驗體。而知神製之所由。據字原之存。而知有五十韻。據多集廣考。而知神字之無比於四洲萬嶼之字。據正體。而知譌字。據彼而知此。乃不取古賢先正所論。幽討深索之未盡者。不取諺文疑似之論。

不取偽經妄書之亂真奪粹者。不取數量甲子之字。跋文題言之說。似可取而不可取者。是皆瞭々有可徵者焉。其他確論定說之多。一讀而可知耳。翁既著開題記。而有論此事者。此書蓋雖有棄舊執新

者。而大意之所在。猶崑崙泰山塊然一定而不復革焉。故彼記與此書。表裡實相須。則讀者當參考其異同也。於戲。翁其何人。而能如是也。蓋其志以為吾之所鶻言者。苟忠於神。於皇。於國。則此書

當不朽於千載之下矣。苟否。則有如秦人坑焚之災。其誓於神祇也。如是。是以其書往々慷慨憤愴。洗濯天下之耳目。而不復顧前後焉。然而世狗奴鼠輩之多。嫉之妬之。將妬々以其微力。而輒動乎萬

介之論。其不能然者。亦將一言一
默。謗誹於其陰翳之地。可憐哉。噫。
其蓋知世唯有縣居鈴屋兩夫子。
而知此翁之所以為此翁也。夫友
友其心。心之所合。苟非所謂道。則
孰若無友之為愈也。今余之與翁。

即心友也。是故余之所言。翁採而
記之。翁之所說。余讀而信之。此書
之成。亦經余之手者居多。則吾豈
得不敢為虎豹貓鼬。而驅彼狗奴
鼠輩哉。然則天下獨有吾。而能知
此翁之所以為此翁矣。請遂言之。

蓋此人也。窺天神地祇之德。察現世冥府之道。為和魂漢才之人。成古傳事實之學矣。其謂之人中之神。學林之聖者。不亦宜乎。是為序以應其需。

文政七年七月

屋代弘賢撰

曾我常昌書

奥は波へつ波もちるす。勢すすむ吾
氣吹舍大人が正喬をねめてはゆ
神かしすく聖にまけり。神かし
うじひよはまうねど劍を刀さやぬ
ぬすきて刃身のその人まもおはす
ゆきゆきかく思ひつあるふゝいの時
凡の神字曰文傳のうむしますを

とて聞よされば神いはく屋代翁ヒラ
はやくえまきされて神カミと聖ヒジリと称タマへ
うわさうめを代トシすとくわ や
字斯ガみとすりに古學ヒルギ 結タマ
了コロしげきれいと肝キモ くくて其ソノ
はまし盡ブヨひもえまくへる席シテとへま
めりてめゆるのみかくめあらば

設ダヤあはれの事ミルアヌムアヌムとめトメナナもてらびて
あア尙サラきもカりカりカみミのノをヲあアすスを
そイ丈サラに玉タマ簾ハニキとトうかカくクねネまマうウまマはハ
くクいクのノふフしシむムめメ可カせセやヤあアそソ六ロ
いイおオしシ聲シテすスめメびビいイまマよヨつツモモあアゆユさ
豆コレ此シのノきキ事フミアヌアヌしシまマとトうウちチ、アヌヌ
まマるマルほホとトへヘどドくクあアめメせセらラぬヌがガゑエ

おもむくへやうでか是ゆきのを保持る所聞得
へ十寸えの鏡ちくくアはこうて大人す
まつめの御の五音や法あしでや行やモ
ねくすまゐるお習まひ乍神まつる事あ
せほ篤をまふる神字もと書きしやるも
はあふ故にみありき波ありとよも
きあえくはまういきへお復らし

をく美メテ又御代乃志ふくふこと
有るをあがと行け掻た手て前
みれ時じくすのめく月のくわせや
け支ぢよいをあめくちよくふす乃
ゆく其後久保乃本末とうひふくも書れ
若狹のあふあもる昇布いろま
れるをえびと神字もあまうとし蕃

國クニふはるうに後アフタふちくらさしいを
ゆの諺文モロコシモノといへるね夜景カレコもかや
めめやめあとあらわつくるば嚴カミ帝
もこす拂取ハラフリぬかへ夜ヨを冠カブリふかく
ふけうむ宿カレの假令タトヘにこれども
にうにまよひし神カミ尔麻ホコ自こられも入
も叙あると、よれ當カタえりいのぞあれの

日文傳スリキとあたまる義訣スリキとをや本ハタケよし
てそふくヒロくさをやせあらばまといし
神カミ乃麻ホコかをもくじタト甚イトも貴タトきまれ
の神字カムナいすそに漸ミホ千ヒ乃石イシあざれ
あまアマをやくいそアマの行ヨリわめるわシモしま
あれふみほめ坐ツクシ坐ミチ色ミチのこち了モト
相田饒德サタウタケトといへる人ヒトい字シモ斯モト許

ハ画ひまむ昂めはくらか良ニ也他し
人よもこへらむにあ氣吹人舌の庫
よを頷うあ波の良幸ねとふもするみ
うとくみ色のみるつとおしんれ
すもくしやあはるほえみうほく
ひきゆくよくゆあるじいの筆記

筆ぬくふ人寫は、是を

ふをしちひてまづこれうどつを
し鷄るときみていがひめの取じ
心ふねひよけある面しめ美濃國
人吉村時安みちかふ伝ほゆ人
外垣を護久保田深根水ふそうち
手立つ邊詫詫をもほつすもゆあ
共ふさうおれ板にあらせて四方

6.12.23

神字日文傳上卷

門

越後國

高橋國彥

平篤胤謹輯考

人

筑前國

相田饒穂

同

出羽国

佐藤信淵

校

○まが取去法て云べき事ども

齋部廣成宿禰の古語拾遺下。上古之世未有文字。云々を書れ
みれど然らば實ハ神世ノ文字有し。と。論ひ。古史徵の
開題記。神世字比論といふ條。委く徵し。論。子流。如。し。そ
ぞく信得だ。まさ論。ひ直に。こやをも得爲。だて。只。不。お。ぶや。心。お
居る人もあ。正と。其。も。佞鬼。不。心。字。奪。はれ。ある。人。よ。し。あれ
き。此。日。文。の。考。も。彼。條。を。そ。く。見。た。き。て。後。小。見。る。傍。し。然。ら。で。は。曉。

ぞ。然る性き倫も。今ちて神世字カミヨモジ。前小彼開題記を著せ
云ふ限アラタ。不非アラタ。ちて神世字カミヨモジ。前小彼開題記を著せ
流頃フロコトまでは。猶アラタいまと。是ぞ正し。文字あらむと所思オボコト。流フロを考
定サダ。免アマざとし故アラタ。今世小神世字とて。彼此カレコレ。寫シタウし傳ツタウふる中カ
は真アラタの物も有アリ。然れど未考アラタへ定サダざれば。熟くそば信偽エコイソリ字カタカナ正
志アラタ後アラタ。傳ツタウばき物有アリ。バ傳ツタウし。と記せメタガシ。其後アラタも。
何某ナニガレくれば。しげ集アツ。某社ソレノヤレ。あく。比神庫ホグラン。傳ツタウハシカタカナ。と言ひ
傳ツタウ流文字アラタ。ども。或異字アラタ異體サラ。更アラタ。小も言ハアリ。同字同體イコイソリとい
アリ。ども。寫シタウし傳ツタウ。元々。アラタ。書風フクのは。不アラタ。いぢアラタ。字形
の異アラタ。小見アラタ。或アラタ。奥書アラタの異アラタ。あるれど。漏アラタ。遺アラタ。事アラタ。あく。人アラタ
藏アラタ。と見る。小劫アラタ。聞アラタ。小劫アラタ。募アラタ。求アラタ。免アラタ。自身ミヅカラ。も寫シタウし。

他アリ人アラタ。不アラタも寫シタウせて。甚アラタ多く集アツへ。ある。中アラタに。今。この書フミ。小著アラタは
志アラタ傳ツタウふる。日文ヒフミの草アラタ書アラタ。ども。字體運筆アラタ。ふと心アラタ留アラタ。其アラタ奥
書アラタどもの。小緣オホロケ。あらば。聞アラタ。ある。此アラタ。真アラタの物。あらむ。も知アラタ。う
ら。爻アラタ。糺アラタ。し試アラタ。ぞや。と思アラタ。方アラタ。糺アラタ。を。傍アラタ。便アラタれく。い。う。あ。ほ。文字の
草アラタ書アラタ。とも。知アラタ。ば。か。よ。称アラタ。左。右。小。れ。丈。唯。乞。正。小。取。見。比
み。あ。正。し。哉。近。き。お。ろ。佐。藤。信。淵。或。人。の。藏。と。る。を。借。て。見。せ
あ。流。一。卷。比。中。小。神。世。草。文。中。世。所。謂。薩。人。書。也。ぞ。い。ふ。奥。書。伝
と。る。が。あり。第三。小。舉。と。る。遺。文。即。それ。れ。正。此。小。目。畱。正。て。熟。く。視。き。バ。半。字
過。流。不。ど。ハ。草。字。眞。字。乞。符。ひ。て。見。や。流。う。劫。驚。き。は。こ。其。

一卷。神世行文中古所謂肥人書也。といふ奥書ある。眞字のみの一枚あり。第一不舉くる文即ちそきあり。其字も熟く視る。薩人書小付ある眞字と同字や見ゆれど少く異あれど既小寫し置くは中小も三枚ばかり。其體の眞字比有し事を思ひ出て。彼此照し考ふる。果して同字か。正しきば始めて前より寫し置かる。鹿嶋神宮。大三輪神社。彌比古神社。鶴岡八幡宮。大和國法隆寺北庫中など小傳ハれど。と奥書ある草書ども。正り。あの所謂肥人書也。ある眞字の草字れ。眞事を知り。正り。斯て其肥人の書小。縱横。父母の字原をも。記し傳と。然しも心著べて。唯。又。子。字。の。眞。字。を。の。み。視。き。バ。朝鮮

れいはゆふ字。諺文といふ字。不似。ゆふ字。此を。も。と彼諺文を採て作れる。小は非じ。う。半を疑。て。く成。然。る。を。は。と思。ふ。ハ。彼諺文。草書。の。事。を。聞。う。矣。然。る。小。謂。ゆ。ゆ。肥人書。小。は。草書。あ。正。其。體。も。後。世。人。の。決。免。て。書。出。ま。じ。充。意。の。表。ある。雲。烟の勢。あり。まと。年。久。し。く。次。く。小。寫。一。誤。免。と。も。見。ゆ。き。ど。自然。小。優。美。し。た。様。に。正。か。が。上。件。の。社。く。小。傳。ハ。れ。る。遺。文。ぞ。も。元。と。正。各。く。草。書。の。み。傳。は。り。て。眞。字。の。無。を。思。ふ。不。此。も。し。後。世。人。の。諺。文。を。採。て。作。る。物。あ。ら。ま。し。う。ば。何。き。も。薩。人。書。比。如。く。そ。の。眞。字。を。添。て。書。傳。ふ。徳。き。不。右。の。社。く。小。傳。ハ。き。流。遺。文。比。外。小。え。あ。不。數。多。同。字。を。得。れ。ど。も。一。枚。ぶ。小。眞。字

の付ツキとるハ無ナきぞ。かの薩人サトウ書也。と云ナる一枚を得ざら
は一タメうば。右の社カミくれるも。是コレ草書ありと云ナ。とハ絶タエて考
才知タレ法ハツき便タツキあく。はと其シテ草書スケルども。或ハ鹿嶋スカイマ神宮ジンゴウ引出ハシマツルみどりと
云ナ。或タメ三輪ミツウ神社ジンザ小出コハラフみゆと云ナる字。彼此ヒツジ不得タメて。何ナきも
三枚ミツメイ四枚ヨリメイぞタメ寫スルし置スルと。是コレ哉マジ鹿嶋スカイマの小まれコハラフ。三輪ミツウのタメよはれ。同
志奥書オクシある字シハ。一タメうせタメて比較ハラビる。互タメういはくタメう北カミ寫スル
誤ミス。そ有れ。運筆字形ウニキよく符ハマひて。正タマニ小同じコドモ書様シブイある。三輪ミツウ
のやいひ。鹿嶋スカイマと云ナ。互タメう奥書オクシ北カミ異アリれるハ。運筆異アリ。一タメて。
字形シル合ハマげる。多タチをもて。毛モヤ一人ヒトの手ハンド不出タマある物モノあら
矣。各タチ別タマニ。亦タマニ古人的コトニチイの書シル。舊タマニく某ソレい。傳ハシマツル。或タメ寫スルし傳ハシマツル。

係タマニ不違タマニれ。たニタメ知ルられ。又その草書スケルども。日本紀ヒンポク私記シラメ小。圖
書寮シラカウ。梵字ボンジ不似タマニとタメ書スルありて。其字義シラフの準據ヨリトコロ詳サタカ不せタマニ。と
云ナ。亦タマニ思ルひ符ハマき。亦タマニ字形シルある。小タチ。其疑ハダシをはらシ。私記シラメ。圖書寮シラカウ
云ナ。亦タマニ不似タマニ字形シルある。小タチ。其疑ハダシをはらシ。私記シラメ。圖書寮シラカウ
云ナ。亦タマニ不似タマニ字形シルある。小タチ。其疑ハダシをはらシ。私記シラメ。圖書寮シラカウ
書スル比ハシマツル事モノを云ナひて。其書シルの中小ミヅチ。乃川ナガハシ等タチの字シルハ。明アキラカ不見タマニえタマニと
云ナる。小タチ。其シテ不似タマニ似ルある。右の草書スケルども。不有タマニ。おぞアヤシし
く所タマニ思ルき。立タムへ正タメて。彼タメ眞字マジシル北カミ父母カミある。縱横ヨウヨウの字原ハラフを採
正タメて。ちくタマニ視ルる。太兆タケイの驗體ハラハガタ字象カタシマど正タメて。製ハシマツル成ル狀サマ小見ルある
ふ依タマニて思ル。ト部家トベイ舊說タマニ。神世カミコト字シル。太兆タケイの驗體ハラハガタをり出

ある由い方添不思ひ符さき。右の如く諸方カタ小出で。各々別々
不人比集ツドくるを。採アサヒ立アリて考ふるところ。信アシ割符ワリフを合せ
あるが如し。と云アマクばく熟ツラく符フ方カタれど。いとも疑アシキひ解アハシきて。れわ
熟ツラく小考ツラふきバ。朝鮮比諺文といふを。我ガ神世の文字比。古
く彼國カナヘイ小も傳はざる。彼國人のちからを加アシて作アシ
改アシ免アシムと添物あらむと。うおぐ悟アシキて得アシムて。いのて糾アシキし試アシムをや
ぞ思アシム方カタる。予オレ此文政二年も。まと鹿嶋カシマ詣アリう志アシムしめれど。おお
けし置アシテて。三月ヤヨヒの望日モチヒ。旅子立て。常陸カント小赴アモムき。其扱アシテいで。下
總上總の國カシマカシマくれる。教子アシシヘの正經アシキ歴アシムりて。閏月ウルメ比始アリに。家カミ小う方
正アシテて。二十日ばかりハ。何アシテれと。爲アシムさしこ添事アシタシども。執アシムまかす

ひて在アリれる。圓明院行智阿闍利來アリれど。此人アヒト也。淺草里アシカニ坐アリ。當アリ小て。余アリが方外の友アリ。悉曇アシカニ學アシム小いと精アシムしく。悉曇字記アシム新釋アシムといふ物を作アシムれど。此學ありし以來アリス。かばくり比釈アシムハ。吾
未アリこれ見アシムべ。此頃の態アリはと問アシテバ。近アリたる。朝鮮の訓蒙字會とい
ふ書アシムを見る。漢字比アシム下アリ。悉く諺文アシムを付アシムれど。此を明アシテ、
試アシテぞやと思アシムひて。其事アリいみアシムおき居アリよし云アシムふうぞ。いと歡
喜アシムなくて。上件記せる事アリどもを語アシムり。寫アシムし持アシムる肥人書アシム。薩人
書アシムをも示アシムせて。彼諺文アシム。されの皇國字アシム。彼國カナヘイ小古く遺アリ。傳
はれる。其國の原文アリと成アリ。悉曇章アシム小乞アリて。梵字の用
格アシム小用アシムふほく。彼國人カナヘイ人アリからせる物と見アシム。と云アシテバ。甚
く感アシムちろこじて。然アリも有アリらバ。疾アシムく神世の字を。明アシム求給アシム方カタと云

ふうはと思ひ發ちて。已もまが謗文比成とる本モトとて明めて
むと其事の見えとる書どもを。彼此とてれぐとて索めて。屋代
翁小訓蒙字會を借りて。此書の事ハ。第二文の伴信友小朝鮮原
文譯語といふ物をのゆ。古の書也。或人の藏とするを。轉借ある
原文にて書ふる傳也。崔孤雲傳といふ長き紀事を。
ある故に。其用格を知るふいと便ある書あらず。高田與清
小朝鮮板の衿陽雜錄といふ書。漢字の下小謗文を加ふる
形と借用して集す。衿陽雜錄といふ書也。農事直說といふ書と合
正朝臣の朝鮮を攻られし時。取る下て。世不謂也。朝鮮
の分捕本の一一本れあ。清正朝臣乞て。吉田何某といふ鑿師
小贈られとるを。由ありて得と依あ。卷の初。小朝鮮王が宣
賜之記といふ朱印。正月。表紙の裡。萬曆九年十二月日。内
賜吏曹正郎金瓊。農事直說。一件命除謝恩。右副叢旨臣盧と記
志て花押あ。奥小永嘉後學といふ印と。金瓊叔珍といふ印

と二かあゆ。此子ハ所狹きわざあれど。所謂分カケル捕本の有狀を入シも知せは欲くて記した。彼此合せ見て。
謗文比體サキ。委しく辨考へある。第二文の下小記せる
が如し。斯て今著アラハし傳ふる遺文等。找謂する肥人書。薩人書
小て。是やがて。神世比古字と思ひ定める。小れむ。有ハ流。
○近世の人小神代アリ文字と論する。新井君美タツミしそ
始ハジメふ。正々アリ。此ちり以前。小いはゆる神道學者。うちの中。小も。
等れど。今論ふ。そは其著アラされる。書等。小かの上古之世。未
のぞ。正小非アリ。其文字。尾張比熱田社小も。是もし信り。神代より傳は
有ハ文字。云くとある。古語拾遺の文を擧て。出雲大社アリ。神代アリ
傳れる物ありとて。漆アラシをもて。文字を記せる竹簡。あまた有
り。其文字。尾張比熱田社小も。是もし信り。神代より傳は

斗る物あらむ小也。神代小文字かしとは云^ハら文と言ひ。
但し此字秦の徐福^ダ我^ガ國小來れる時^ハ百篇の尚書を將^シ
來^リと彼國人の云^ハれむ然る物小ハ非^シうと言れ^シる
は非^シ言れ^シ正^サる^シ徐福^ダ皇國^ノ來れる時^ハ尚書を將來れ
正^トいふ說^シ元^ニ正^サ漢人の漫語^{アキ}ぞれ正^サ其由別小辨^シ
ふる物^モ所^レ謂^シ神代字^モあるも比凡^{スベ}て五^カ或^カ其字讀^ハう
あり。或^カ其體辨^フハラ^シる^シ正^サ。或^カ科斗書^の如
らざ^シ候^ア正^サ。或^カ其體辨^フハラ^シる^シ正^サ。或^カ科斗書^の如
たり。或^カハ鳥篆^ハ如^ク正^サ。はと肥人書薩人書^ハ正^サ。とを言
はれ^シ正^サ。或^カ陸奥^ヒ佐久間洞巖^ヒといふ人^ヲ贈^ラれ^シる書^ヲ
文字とて古文殘^リ正^サ。神代文字^ハ太^ヤ御尋^シ付^シ云^ク今も神代
宮^ノ青石^ヲ文字^ハ有^リ之^シ侯事^{元^ニ集^シ}瑞器記^{と申^セ}を
引^キて記^シされ^シ侯^モ出雲^{大社^ノ}熱田^{社^ノ}も^{神寶^ヲ}竹簡漆^シ書^ヲ
書^ヲ不^ト有^リ之^シ侯^{右の如^クイ^フニ}も古き文字^{ど^モ}今も現在^シ有^リ
侯事^も有^ル之^シ事^小侯^{是^ニ}等^ニ事^小ハ形^{の如^ク小}兼^正もし見^モ也^シ
有^リ尋^シ出^シ置^シ侯^ニセども侯^テ東雅^{東音譜}方策合編^{アド}申^セ
此燃^シ既^ク今著^ハ傳^フる字^等を見^ラれ^バらむ^シハ右北^モ
如^ク言^ハる^シも非^シ矣然れど近^シ小歎^正て^シおの日文^ヲ見^シ
テ^シ神代^ノ文字^{アリ}と^シ言^ハる^シ此主^を始^ムと^シばら^シ往^ニ屋^ノ代^翁の許^シ
方^ノ京^アる^シ或^カや^シと^シき僧^ハの來^テ家主^ハ往^ニ年^ノ神代^ノ日文字^ヲ
の諸體^ヲ集^メて其^ノ說^シを書^シる^シ書^ノ應永^{四年}北^シ奥^シ書^ハる^シを^シ
見^シお^シこと有^シシ^ダ今思^ハず寫^シ株^シ正^サ一^シ事^のいと惜^ケり^シ
き^シと語^シくる^シと有^リ應永^{四年}ハ今年^ハまで四百二十三年^ハ小^シ
や^シら^シ其^ノ書^ハ何處^ハ小^シ有^ラシ^ム見^マナ^シき^シ物^アリ^シ正^サ

○寶曆十三年北ころ尾張國八事山興正寺の諦忍和尚と云
方^ノ京^アる^シ或^カや^シと^シき僧^ハの來^テ家主^ハ往^ニ年^ノ神代^ノ日文字^ヲ
の諸體^ヲ集^メて其^ノ說^シを書^シる^シ書^ノ應永^{四年}北^シ奥^シ書^ハる^シを^シ
見^シお^シこと有^シシ^ダ今思^ハず寫^シ株^シ正^サ一^シ事^のいと惜^ケり^シ
き^シと語^シくる^シと有^リ應永^{四年}ハ今年^ハまで四百二十三年^ハ小^シ
や^シら^シ其^ノ書^ハ何處^ハ小^シ有^ラシ^ム見^マナ^シき^シ物^アリ^シ正^サ

方ぬが。以呂波問辨といふ書を著じて。神世小天照大神の勅語もて。大己貴命小斐普味譽彙務奈夜古堵茂知燼羅年紫紀流度園厨窟努蘓汗哆坡昫馬嘉有於依爾凜利汨轉能摩數亞世會飾列氣といふ四十七音を授賜方正しうぞ。大己貴命。を受て。天八意命と共に。神字を作正給する。或後代ノ漢字を以て書換と。聖德太子北時。平岡宮と泡輪宮と小納正て在し。神字の記錄を借出して見給方る。古書小委く載み。正篤胤云。此說も。かの黒龍の潮音が偽り作れる。舊事大成經といふ物小記せる。妄說小本がきて。言ひ出ことる說を正。此諦忍といひし僧も。空華老人とも稱る。ぐくさく著述ども。有て博識と聞えど。大成經の事を々々辨方ざりし。小こそ然れば。此僧の神世ノ文字あ正と云。るハ宜なれど。其本がくる說も非あ。れ本第一文の下小論ふを。合せ考ふ。併し。

或人問。神代ノ文字何らバ。今世小殘て傳ハるべきト。一字も傳はうざるをい。小貝原篤信が自娛集。我邦上古無文字。讀古語拾遺。及匡房箱崎廟記。而可知而已矣。此二書古代之作。可佐證矣。或以爲上世有國字者。妄說也。是無稽之言不可信焉。といひ。太宰純が和讀要領。吾國小文字亦記事也。先賢の説明白ふ。齋部廣成が古語拾遺序。上古之世未有文字。貴賤老少口々相傳。前言往行存不忘といひ。大江匡房の宮崎宮記。我朝始書文字。代結繩之政。即創於此朝。といひ。此朝とハ。の時をさせる。あと二善清行。昌泰四年の勘文。上古之事皆出。口傳。故代々之事應有遺漏。とかり。此等三れ證とも。近

頃筑前乃貝原損軒も。諸説小ちて。吾國小文字ふ凡事を確論せど。損軒も。吾國の記載よ博覽あらずし人れど。其説もとも信がゆ。と言方で。いかゞ。答。兩儒者の論があるとある。無稽比甚したあ。君子は其知ざる處小於て闕如。腐儒者ら。胡爲ぞ猥。小頑口を開きて。知らばと爲ざるや。本邦上古テ文字のあしよ。晴天白日也如し。何の疑ひ有らむ。然る小廣成匡房の輩。深く考方ば。上古小文字れしと。證據小備ふは無稽あ。貝原太宰グおとを。其僻説よ黨して。證據小備ふるを何事ぞや。一盲衆盲を引きて。火坑ノ入あとハ。此事ある法し。古人あとて恃むべからず。孔子は後世可畏とい方で。

大凡そ異朝を崇えて。其餘字蔑するも。儒生の僻れ。貝原太宰。日本小生れ。アガラ。其學ぶ所小僻して。我國を鄙むるは。固陋の甚したあ。舊き神社。ハ。上古比神字今小殘れて。儼然と志て存在するれど。然きども深密小して通用しがみき故。世小ハ流行せざるれり。末世小も。漢字まことに呂波字。もあはざ省易小して。事用不便ある故。神字を。社。く。小深く藏して有。あれ自然の勢れ。あぐ本邦のみあらぞ。異邦も。上古の文字を通用せば。後世小作れる新字。盛。流行を。亦。次第小省易小走る。致を所あり。實。小も日用の書通。小蚌書。あどふては。以北外小迂遠。末世自然の勢。小て。然ら

ばる事を得ず。記せ。法の以呂波問辨の説も。くとくしき
但一かく論ひも論方れど。末小漢字の事比み言ひて。神字を
著さゞ。正しうば。同國ある道樂菴敬雄と云方る僧。そ北駁論
を作立て論するも。我國の往古。文字有しと云。また甚肯ひ
がとし。若文字あらむ。名山古跡小也。一字半點れどとも殘り
在法き小遂。小そ北事あきハ如何ぞや。特ノ億兆の人あきば。
四十七字全く覺えどとも。せ免て兩三字あざとも覺え傳ふ
ばし。言正しうば。諦忍うさ称て。神國神字辨論といふ書を
著志て。神代の神字儼然志て。今小名山靈窟小存在せり。汝
がと丸井蛙北輩の知ところ。非矣。予が祕本あれども。汝ゲ
ば

輩の迷謬を愍むぐ故。已あとを得ず。謄寫せしめて。見る事
を許をとて。第十一。舉。遺文を書著し。右現在鎌倉鶴岡
八幡宮寶庫といふ奥書までを載して。予が前小舊丸神社小
也。上古北神字今小殘りて。儼然と志て存在を。書しハ此事
れどと記せ。右の駁論を著せる。道樂菴敬雄と云方る僧也。
字辨論不おき。是ぞ今予が著はし傳ふる日文字字。世に著せ
て見るべし。是ぞ今予が著はし傳ふる日文字字。世に著せ
る初小也。いとも感みき功あざれ候。此をねらく事情を思
辨を作れる時。既くおの日文字を得て。藏とどとを通され
ども。淡く尊み思ふ心。容易く世に現りがて。不して祕藏と
正し哉。敬雄が上件のごと難とする故。已お然れど其音找配
を得ぞ。神字辨論小著せ候れるばし。然れど其音找配
ざ。又も鶴岡宮小傳ハ正ある小は。元ちゆ音譯ハ無ざしと聞

えあ。其を予往。かの宮北神主。大友平翁と云。人小相正し
時。此事を問方る。小實了神字辨論小出せる文字。神殿小納矣。
されど。音譯あき故。何事とも知れぞ。云。正だ。文。それをち
此。遺文の下。云。も見るべし。さて此。以呂波問辨。神字辨論
此。二書を委く見於る事。ハ。往一文化八年。小駿府小もの。一
其頃。其字を得ざる事を甚。上古小文字有り。と悟れる物。ク
はやく此。二書を讀て。これあむ真の神字ぞ。と云。方正しき。ど
頃く。其頃も。かがて信ぞる心あれ。あく歎き思。方正し。小原雄秀老翁。グ。
愚如小て。明志。見詠。小恥。うして。彼老翁。既く。所思。此字。眞の神字を。得於る故。かく論ふ。を。今
思ふ。唐土。文字の國。あ。余程。何を。書と。大事。小云。出せ。る。字。數。れ。ガ。ラ。あ。ぐ。蛭。蝶。見。記。し。正。其さへ。蒼頽。ちゆ。前。小。を。文。れ。ハ。小。字。一

○神字日文傳上

○十一

學ぞ。取臭ら。ち王。あ。百土。前。ア。蛮國。小文字の。あき國。大分。あ。日本も。神代と。さ。い。西。出。き。ア。し。れ。ア。て。上古。余。文。王。北。頃。不。あ。と。殷。世。六百。有餘年。夏の世。世。ハ。漢
多々。然。其。宇。ス。れ。斯。兒。あ。藤。塚。長。秀。字。著。せ。る。人。小。て。尾。張。の。吉。見。幸。和。俗。說。辨。了。神。代。ア。リ。田。道。の。碑。と。い。之。ゲ。弟。子。あ。吉。見。幸。和。物。と。字。れ。文。舍。人。親。字。生。ふ
世。正。ア。ゆ。而。其。多。オ。の。意。の。神。主。ア。リ。故。了。愚。神。字。辨。論。の。說。字。取。き。然。事。れ。ア。吉。見。幸。和。論。ア。リ。中。小。神。代。ア。リ。文。字。れ。ア。吉。見。幸。和。物。と。字。れ。文。舍。人。親。字。生。ふ
ア。諦。忍。和。尚。の。鶴。岡。宮。小。傳。ハ。れ。る。字。を。世。小。著。せ。協。ア。正。其。小。ち。今。ア。論。國。と。字。癡。言。を。や。密。い。う。先。く。心。有。レ。セ。れ。ア。趣。ア。ベ。る。い。物。と。字。れ。文。舍。人。親。字。生。ふ

驚木口うちれて。諸國の神社古寺小祕オガ爻置オガ正し遺文オガども比。次々
小現アラハ生て。今ハかく數多集アタアツめて考へ合さ協アハ事としも成
小矣アラ。然れど其現アラ毛アラとる字アカどもの中アハ少アラ作れ正アハと見
諸國の神社古寺小。神世文字を祕オガ有し事の由緒ヨリ也。第十三文
以下小考方記オシを見候べし。

○予オレ古紀日文傳ヒブンを考方記オシに最中ナカ小時アハとく高田與清二部の
書を得て。與清己オノが古の頃乃舉アハを知れアハ。ばだ見アハとて
贈アハれる哉見るアハ。一部也。和字攷ヒツツといふ書小て。三卷阿アハ京あ
該敬光といふ僧の寛政五年比頃アハ小著アハせる書あるアハ。余も寫
志持アハこれど。信アハごとく覺アハゆる字アカどもを多く舉アハて。かの大成經

哉引たて註アハし。今傳ふる日文比草字字アカも舉アハて。そ乃信アハご
等アモも。これ附錄アヒツツ小一部ハ。神字の志らアハをいふ物小て。おも上
野國桐生里ある。中澤宏粲ヒヨシちふ人の。いと近く著アハせ該書ある
が。附錄小。神字中臣祓正實ヒカヨミと云アハ。此を余もう称て寫
志置アキたる。伊勢國龜山ある。岩田惇德と云人の。みぢから書て。
阿波國名東郡佐那河内村サカウチある。大宮八幡社小納免アハとる。中臣
祓詞アハ。神世の物ぞや思ひ過アハて。其非訓アハを正實ヒカヨミとし。師の大
祓詞後釋比訓ヒヨミをいふく誹アハり。此も舊事大成經を引たて註アハせ
る書アハ。かく誰アハも彼アハも。かの大成經を眞アハの古書と思ひて引
用アハふる。ハいと異アハしくいざ哀アハむべき事れ正アハし。
けて其志らアハ小。今著アハじ傳ふる日文の草字をも舉アハて。右天王

寺傳來神代文字也。此文字常陸國鹿嶋明神宮文庫亦有之。上總國市原郡菊間村神主根本平佳胤記之。といふ奥書を記し。はと阿波國大宮神主充長神名書といち書を著ハシ。其書小とて同じ草字のや、異なるを擧て。右日神所告思兼神四十七言記以傳之。國字起于此。といふ奥書をも載せ。然して其言小。かく比如く。天王寺。鹿嶋神宮。廣田神社。阿波國大宮小も有。然る小神世小文字あし。今世不あるは。偽作か。と云ふ人あり。實小文字あしとて。有と云ふ。御國を尊み稱る義ある法。篤胤云。かくいふ意もいと愛れど。實小おき物小神世々有來しよと。いやく。抑神代小文字あしと云ふ。も疑ふべき事非ばうし。

古語拾遺序小。上古之世未有文字。とあるを證と見て。本居宣長も古事記傳の首卷小。大御國小も文字れし。今神代の文字あと云。もけにあ。後世の人比偽作小て。いふ足らば。ふぞ言方れども。強言あ。加茂真淵を始。宣長は。皇國の道字聞くと云方ども。漢意はあれど。和漢混雜ある故小。明。よ知ら。え。強言をいひ出して。世人を惑ハシ事。鈴屋大人共。神代小文字あしと言れ。ハ考の龜。大。人共。神。考。和漢混雜ある學問と云方る。甚も先だらしき語をぞ言ひ出。はさ小知。あべし。漢意の博學ハ。御國の道比仇ある事を。みと方博學秀才也。世小名高しと云方ども。名小恐。あく事。あく邪正眞偽。字々く工夫を付て。明。小考へて。正しを法。小近。お

くほし。御國の文字を加奈といふ。加牟奈比畧あひ。加牟奈
找漢字小譯しては。神字や書べし。日本紀。帝王本紀。多有古
字。撰集之人屢經遷易とも。同紀比跋。推古天皇御宇。聖德太
子。始以漢字附神代之文字傍とも。ト部家の舊說。欽明天皇。
吾國比文字を止めて。韓字のみ通用をほしと。常磐大連。小勅
志て。神代より傳來の古書を。韓字をもて書代させ給ふ。カ
ミヨ。といふ和字比傍。神代の二字を附け。アヘテラスとい
ふ和字比傍。天照比二字を。如此く志て。和訓小漢字を
付合せ。其後推古天皇の御宇。小廐戸皇子。儒釋の道。弘
免むとして。神代より比古事舊記の。和字比傍。悉く韓字を

付しむ。も有れど。神代ノ文字有し。あと詳あるを。無といふ
は。人の眼を放ぶそれ。あど言方。この宏粲といふ人の説
みて記せるれど。中ふたいひ得
ある語も。はと無ふしもあらば。

○伊勢國龜山人。岩田友靖と云。布人も。神字眞傳といふ書を
著して。今予が傳ふる。第四文小舉。とる草字を。明矣。とゆと聞
ク。然きどみがうらを手して。少く其事を記せ。旡物。字見於
添小。此もかの大成經ふとて。立てる説ありけど。其全書は。
いかゞ有む知ら。此友靖といふ人。上不出せる惇徳と
云。人や同人。又ハ親族。下てえ。有ほし。
○あと近。おろ大野。尚芳。が寫し藏。と。皇和神代字集。と題せ
る書を見。ほし。今傳ふほし第三。第四。第九。第十二の草字ども

哉始矣。其餘くちづけ字等を擧て。その末不云乎。又言不。此
は神世文字とて。いぞ古を神社の御庫小虫食み遺れ正しを。
遂小を散く。小あて。神世字とふ物也。永く失終ふむ事の。い
と畏々きば。遠き世まで小傳可足はし。天地と共に。長在し矣
むぞ。かく書集むる小就て思ふ。神の御世小を。文字てふ物
は無也。向言へ依ハ。事狀をとく思はざる故あら
也。あ法て物のまさ小妙ある理也。四方の國々に極み。末の
世とても變る法くも非ぞ。けれどいぞ。上世小。神うち神
集ひ。政ごち人草の妻子ら親びぬる状也。末の世に状小も
違ふまじけど。神比御世も。字とふ物の無てやハ有べき。然

るを。神世字とふ物ハ。偽事也。一向不置也。相ふは。強言不
取を。又或人の此字のあと。古書を見ざ候ハと云ふも。已
ゲ足ざ候心のまふく。言い出候る僻言小をも。然を有れど。
傳可小し文字。皆れぐら。神代の物とも思ひ定め難し。其ゲ中
不も。以呂波歌とふ物の次第もて。書あせ候ハ。言ふ不も足矣。
日々み月よニ比文字も。漢籍北傳ハ。而來し後。作れるれど
ほし。はとアイウエオ北五十韻の音も。次第あせ候も。上世
の所業不あらじ。然れど御國ある千ぢの語也。お北五十韻の
音不通ふ趣を思方バ。一向不。神世不は。五十音の次第あせる
は。無也。しとも言ふも。おの書集おる字等北中小を。あぐヒ

フミヨといふ。四十まで七。お北音もて。次第くる字ぞ。其言北
はまを字の形も。他國小比^{タチ}ふ法き物あらじ。實小千早^{ヤハ}ぶる神
世の物あるほし。然も有れど。千萬年。いや寫志小寫し。おれバ。
文字北形^{サマ}も。上世^{サマ}の状字失方^{ナシ}也。多う候べし。其^ク中不^ハ法隆
寺小遺^{アリ}。又ゆし。廄戸^{ウマヤド}皇子北^{サマ}寫し給^{スル}。一ひらは^{フミ}筆^{フミ}の運び
の状。いぞ妙^{タマ}不^ハ志^テ。阿夜^{アヤ}小かし。おく尊^{カミ}た物小^ハあも。かれ漢字^{カラ}
をう候志^{ムニ}思^{ムニ}ぶ人ら。おの字北さまを熟^シれ^シひて。彼處^{カレコ}の
字哉書^{アラ}む不^ハは。彼國北筆乃聖^{セイ}等^ダ。寶^{タカラ}あして書傳^フふる筆^{フミ}
北法^{タマ}も。おの文字北妙^{タマ}あ候状^{ハシ}。おも^{アリ}盡^{ツキ}燃^{スル}事字^モも悟^ル。お
ばし。寛政七年十二月十五日。上毛野國れる閑亭^{カミツケ}と記せり。お

書も寫本不^ハて。此文をぞ。世の古學者ぶ^{アリ}。乃延^{ヨリ}言約^{ツヅ}言^{アド}
用ひて書^{アセ}る。いと長き文^{アリ}。れりし。其意も通え難き^{アリ}。煩^{アリ}
くて。通え易^シ。支趣^{ツツ}不^ハい。あく切^{カツ}先直^{アリ}。て記^ス。けて此^カ閑亭と
いふ人^{アリ}。上野^{アリ}國とぞ有^リ。ど何^{アリ}。ある里^{アリ}。不^ハ住^テ。實名ハ何^{アリ}。
アリしや。尋^シね。そ母^{アリ}。上件の人々北言^{コト}ども哉^シも。始^{アリ}。かく
ベ支由^{アリ}。そ母^{アリ}。上件の人々北言^{コト}ども哉^シも。始^{アリ}。かく
並^{アリ}。哉載^シ。候^シ。は。神世北文字を世^{アリ}傳^ヘむと。功志み成^スせ
る志^シ。北。いぞ愛^シ。いぞ愛^シ。いぞ愛^シ。所思^{オボ}あれぞ。其志をも世^{アリ}らはし知^ル
矣。はと今は。世^{アリ}外^{アリ}支人の多かれバ。其靈^{タマ}字母安慰^{ナガサ}米^ミと北
わざ承^ス。れ布^シ次^ス小^{アリ}。神字の事^{アリ}功^{アリ}。候^シ人^{アリ}の名哉^バ。所
狭^カきをも顧^ス。を^シ記^ス。著^ス哉^シ。見^シむ人^{アリ}煩^シしと^{アリ}咎^シそち。

○日文四十七音

文一第

日文を比布美と訓ばし。此を擧ぐる四十七字を。いはゆ
る比布美の次第小讀べき由。誨ガくるれば。故あき小
依びて。左傍て北字より片假名をそぞれ。日
文ちふ言の義を下小註ふを見るばし。

기 키 허 히
그 텔 허 허
이 푸 허 미
이 푸 허 허
아 페 허 허
아 페 허 허
이 푸 허 허
이 푸 허 허
마 퍼 허 허

AT 스 퍼 헤 이 라
다 타 아 니 달 타
서 쟤 사 사 하
어 어 코 리 ㄱ 틱
하 흠 허 헤 머
거 레 쿠 더 헤 가
거 흠 ㄴ 틱 어
마 봄 허 이 오

画は上ある四十七音の字北母と爲て。縱韻小用ガる字
多氏と音譯をばし。縱の義小て。Tトトトト北五

原あは由を著せられど。

ト^ウ

ト^オ

ト^イ

ト^エ

ト^ア

ノリト 九畫

ノリト。余許と音譯をばし。横の義小て。ヘ合□コレフエ
□○九畫ハ。上ある四十七音の字比父と爲て。横音小
用する字原あは由を著せられど。

ヘ^ス

合^フ

□^ツ

コレ^ル

フ^ヌ

レ^ク

エ^ユ

ム^ム

ウ^ウ

右神代四十七音字者。天兒屋根命之真傳也。對馬國ト部
阿比留氏内々傳之可祕焉。○一本云。右日文四十七
言者。日神勅天思兼命所作云。一本まさ一本も。
右神世行文中古所謂肥人書也。以上は墨小て記し。以下
本末下北總國人大中臣正幸傳源八重平。八重平傳
之政文者也。本末下北總國人大中臣正幸傳源八重平傳
此校合せて。横不作れる字のみ整字。その次に举と彼
る遺文の真字ハ。皆縱に作れる字あれどれど。縱不作れる
字とは。口を下。エを干とくける類をいふあり。堵まこと右
の校合せくる六枚の中ふ三枚も。十を九。コ字己。合を合。

「字上不作れど此尤かの朝鮮の諺文を見て近世の人
比さうしらせるが弘いを用ひむ。其を父母比
し。○はて大中臣正幸といする人也。神小仕ふる人ふる者
字原小合ざれど恐也。其由下小字原を解くを見て知は
ばく所思也と云ふ。入も何處の入小也。政文とも知は
ばく所思也と云ふ。入も何處の入小也。神小仕ふる人ふる者
は長を羨れる入子て呼名字大竹喜三郎と稱し人れど
云者あり庸聽也四十餘年ぞくり前小年六十餘小て身
まうべき。其後八重平京都にて神學の聞えありて吉田家へ
出しき程あく故人とあれどさて父も若くて三十
年ばかり前ノ身まうりぬるを母ハ六十年阿まで長ら
方とる。其時の事知居て語り思ふ源八重平と云
ハ此人あるべ。○右北日文四十七字也行文と有れど真
志と云へど。字見也此字傳方とる阿比留氏は對馬國ト部と有れ

ぞ天兒屋根命の裔あゆると疑あし。對馬國のト部ハ天
雷大臣命ちり出こと古史傳第六十段小委く註せんを見べし。故古の日文字を傳來
ふルむハ實然も有。傍き事歟。はと此字比作者のニモ
一本小天思兼命と阿也。實然るべし。但し日神勅とい
らむ。知る在天兒屋根命天思兼神ハ同神の異名ある
也。古史の徵と傳と小辨方とあく恐る。此文字を
熟く小視れど太兆の驗形を字原と志て。製れりと見也
也。その太兆れト事ハト部遠祖天思兼命亦名天兒の
始々給方の業あれど恐也。太兆とぞ鹿ヒ肩骨を灼てト
相古業あらぐ此事ハ信友が正ト考小精く記せるを今

此ノ要と云る所を摘て記さば。まが鹿比肩骨の形狀は。



かくの如く小て其灼瘞き地を縱小長く横を狭く下比
方窄くて其形を大む。○如此く小て明の徹るば
うで薄し。およそ縱四五寸ばかり。横も上方一寸六七
分ばかり。下の方五六分ばかり有て骨の大小
其規量ハ違ふことなし。此處小驗體字。十かくの如
く畫たて灼く形也。然るを後ヨ漢國の龜トを傳方て其

を換用ふる小於りても龜甲は厚くて灼ぐべからねば。其
灼瘞き地を小さく薄く。□か丸丸如くトアモ薄ぐ。此
穴といふ。其穴の内小驗體字。十の之の如く畫あざ
と成み。此を龜ト法よ素より原兆とて。□の形
を画きて物をも小倣方あれど其元を鹿の肩骨比驗
體找畫く地の趣。形どれるふ流べし。其ハ周礼小太ト
て法原田也と見え。說文小ト灼剝龟也。象灸之形。一
曰象龟兆縱横也。田の口也。龟甲不剝。云く原兆とあ
れ。中不剝。云く原兆とあ。斯てまさ後ノ按ふ小世子神代字とて傳ハそれが
とも奇妙しくいぞも尊き由縁あれど。云く原兆とあ。古傳のう字も。云く
本思子也。上小說へる漢字のト字も。云く原兆とあ。いを。

ゲお遣り傳れる兆の形象不ぞて製あらむ。まさ
旧くト兆を神世字比源あざと云ふる説も聞ゆる也。古
の眞實乃語言の傳れるれらむも知べく。そ説方カタは小就
らぞ。争いち早く考證著さむ人もがれ。そ説方カタは小就
て按ふよ。彼國比龜トは。もぞ我アタマ神世乃太兆法の。彼國
小も遺ハガキ傳れるを。後小鹿骨を。龜甲小換カタハシこと疑
志。かくて此驗體成。十此の如く書ことは信友アシカニが説不
限らぞ。今諸國小傳ふる處。みふ同狀カタハシサ。あざと聞ゆれど。
此を誤ハシメテ。但し此を謂ある事と考得する説カタハシ。極て十
あれど。容易く此處小著カタハシし回し。極て十
かく比如くあらむ所思るあざ。そもそも麻知形と云
也。斯有る形を云ひ。上小原兆と云。云カタハシるも同じ。辻ツレあど云を思ふ不
も。十あはおと炳焉カジケルく。其を未だ故由ある時小正しく

幽冥の神慮カミヨウを伺ひ奉候小は。上下左右かねらタヒラぞ。等タヒラカ
して。甲乙有アリまアリ死理モトリある事。そく思ふばし。十。比如く
小ては。左右同イシタ量リヤウと云カタハシ。上下何ナニて等タヒラける
を。何ナニそや。其本原ハタハタも必ス。あるばく思ひ定カタハシこざ。此を
最ハシメテく幽カミき謂ある事。あはを已。殊小委く考記せる物あれ
ば。此アリハ大略アラシを云カタハシのみぞ。さて此麻知形カタハシ。□
不換ハシメテこれぞふぞ。其ハ肩骨カミはいと薄カミくて。圍カミを剥ハシメテらハシメテ用ハシメテ。用ハシメテ。之アリ。而用ハシメテ。謂之アリ。フトアリ。云カタハシ。異朝カミ始者ハシメテ。鹿カミトハシメテ之アリ。以ハシメテ鹿カミ肩骨カミ而用ハシメテ。謂之アリ。私記の説をも思ふばし。元史カタハシ。羊カタハシの肩骨カミを灼ハシメテトハシメテを行ハシメテ。事の所見カタハシくるも。古法の傳ハシメテ。有アリべき。加くハシメテ後アリ。それ龜カミト法。まアリ皇國カタハシ小傳ハシメテである

小其法もと同法あれどよく符するを然る物あるふ況て灼く物の龜甲ゐるが鹿骨乞は取みう便宜しと爲て。對馬ト部北人アマツクニ内アマツシテそを用ひと説ぐ天智天皇の御世ヨリ小令典を撰ば志シテえ給ふ時モよう板古風字止シテ未て漢風カナブリ子ヨリ依らむと爲とはふ御舉アマツヤシあアマツしうは此時公オホシタ用ひ給アマツする故モ大寶令アマツタケイトアマツタケイと記シルされあアマツ義解アマツシキ上アマツシテ者灼アマツ龜縱横之文也と見え同く集解アマツシキ然る字モロコシ漢土アマツシテ邊アマツシテ者アマツシテ小灼アマツ驗アマツ爲アマツ兆アマツタケイとも有アマツを思ふアマツシテ然る字モロコシ漢土アマツシテ邊アマツシテ者アマツシテふきはアマツ龜トアマツタケイはアマツ我アマツ古アマツシテの鹿アマツタケイトアマツタケイ彼國アマツシテも遺アマツシテり傳アマツシテれアマツシテは物ある事の本モト子辨アマツシキ矛交鹿アマツタケイ正アマツタケイトアマツタケイを絶果アマツシテある故モ龜トアマツタケイを用ひ其子神代カミヨの太兆アマツタケイあアマツと言ひ成せアマツシテぞ思ふ

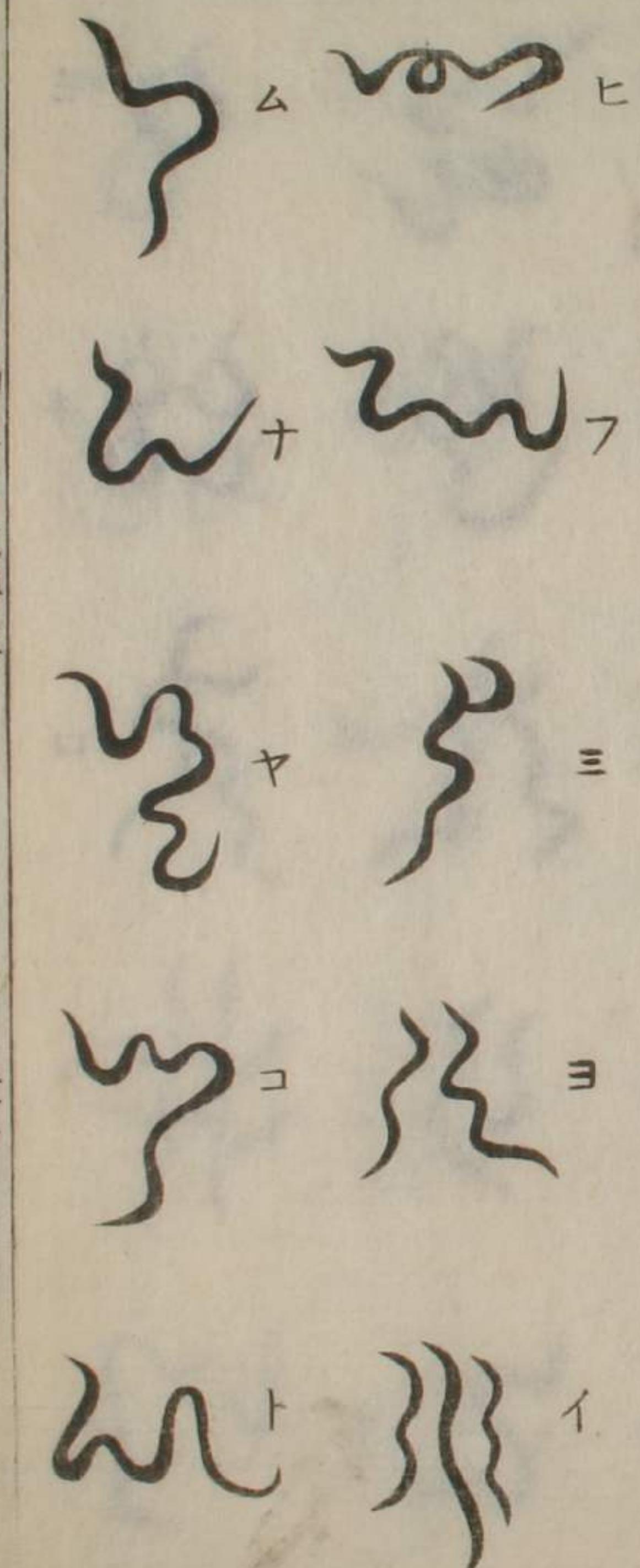
免るは未アマツ志アマツ想像アマツシヤウあアマツかしアマツシテあアマツ此アマツシテ事古史傳アマツシタ小委アマツシテく註アマツシテいふのアマツシテみアマツシテあアマツて此字原を太兆アマツタケイちり出アマツシテること疑アマツシテあく所思アマツシテ流由アマツシテ縦アマツシテの五畫ハ驗形アマツシキ凡アマツシテ十アマツシテを裂アマツシテて作れるふて。トアマツシテ十アマツシテは十アマツシテを左右アマツシテ二アマツシテおアマツシテ別アマツシテちアマツシテ一アマツシテを中アマツシテの一アマツシテを去アマツシテゆアマツシテ上アマツシテは十アマツシテ一アマツシテ枝下アマツシテ小刦アマツシテ丁アマツシテ十アマツシテ一アマツシテ枝上アマツシテ小付アマツシテと流物ある傍アマツシテし横アマツシテ九畫は田アマツシテ乞アマツシテ出アマツシテこと小アマツシテてほアマツシテ刦アマツシテ○を□字圓アマツシテ小象アマツシテどアマツシテ工アマツシテ十七アマツシテ中アマツシテの一アマツシテ枝中斷アマツシテして上下アマツシテ小付アマツシテ。フアマツシテレアマツシテハ□を斜アマツシテ小裂アマツシテと本アマツシテ比形アマツシキをそアマツシテ比儘アマツシテ小二畫アマツシテ別アマツシテち用アマツシテひよりと見アマツシテえ。コアマツシテは□を縱アマツシテ小眞中アマツシテ乞アマツシテ裂アマツシテて二畫アマツシテ小爲アマツシテくるあアマツシテ合アマツシテは□を斜アマツシテ小裂アマツシテと上アマツシテの一アマツシテ畫を○ふ象アマツシテどれゑ小冠アマツシテらせ。

へも□字斜小裂ある下比一畫を其儘小引起しこな物
を見えあ。但し此を唯ふうち見とる有のまふく言
入々く考るあれバ中ふも當らざ亦も有ハルれど後
て定むべし上件四十七音の字を。お比五畫九畫を縱母
横父了用ひて作れる故。日文とは言ふ恐るべし。然る
は日文とは火文の義子て。鹿の肩骨を波に迦の木。北火
もて灼て。それ火塙比食法き文字音の符印と爲る。ミ
ア出あは言と見也。漢土のト兆の字ども皆そはと布美
てふ言を開題記ふもうおぐ云へ法如く。文字北漢音
を。皇國の音小轉志て訓ふ爲と法あ。と云ふは舊
説あれど舊見ある法く所思あり。そぞト兆ハ其ト相と
說事を印驗しおきて。

旧を見る料のサア
設あれぞ。猶まと此四十七音北文字を。すべて比布
美と號とる故。其残やがて一二三の數名ふと立て。余
以牟那夜古登毛知呂と。四五六七八九百十方の語字。
神語の片語。小いひ繼と協物ある法し。正訓も。一二三四の
五六七八。ハ九百千萬あり。其言の義。也。古史傳。委く註せるを見る法し。良禰之幾留由章都
和奴曾遠多波久米加宇於衣爾佐里閉豆能麻須阿世惠
保禮計。と云ふも。此小準方て想方ば。決免て片語あるべ
く所思あれど。其義も。いかふとも知法き由あし。此を知
えぬぞ。中く小尊く法べき。然るをかの大成經といふ
命報名親兒倫元因心顯照忍君書此語を記して人含道善
守進惡攻絕欲我刪と譯細田道善
野命報名親兒倫元因心顯照忍君書此語を記して人含道善
守進惡攻絕欲我刪と譯細田道善
家饒榮理宜照法守進惡攻絕欲我刪と譯細田道善
命報名親兒倫元因心顯照忍君書此語を記して人含道善
守進惡攻絕欲我刪と譯細田道善

あれ今世小弘く圖記傳ふ矣。五十音圖の位とハ甚く異
前ある云國て生をしを後改免作れる物と所思と也。此
事五否るも世うき間二十音をの小と上を誰かのハの由三十のも思
違図そ何る件も五件も叶ひ疑あらば。吾大御國小して五
有詳由小音叶ひ思とる。然る抜今傳ハる五十音圖を。此
体あと非國叶ひ思とる。然然かとい方此説あく小著書本をも
じだらうぎ有とほく無ればせらりいく余所思しれし
所思しれしれし。以小然うと思叶往も。もれば。但し我
ちて右北日文四十七

○ウ	ム	ユ	ク	ヌ	ル
オト	モト	ユト	クト	ヌト	ルト
ヲ	モ	ヨ	コ	ノ	ロ
이	미	이	기	니	리
어	머	에	거	너	레
아	마	파	가	나	고



決
ばし。

き去^サゐる音^コア。といふ義^{コロ}をもて。○比上^{カミ}を裂^サを開^{ヒラ}きと
ぬ物^サあらむ。然れど此^コを試^{コロ}う言^イうけれど。尚^ホちく考へて

不審^{イフ}き小^カかたて考ふ故^ハ。まだ丁上^ト一^トト北^ヒ五畫^ハは。又
父母字^{モカ}用^{モカ}ふるのみふて。此^コ一^ト音^{コロ}小^カ用^{モカ}ふかず無れぞ。
四十七音^ハ於^オ阿^アニ二字足^{タラ}ざ故^ハ。別^トモ^トア^アの二字を
作^ツ已^タ給^タる物^ナれるべし。かくて此^ニ二字を。ア^ア乃^タ字北^ヒ父^ナ
畫^ツある。○比上^{カミ}を裂^{サキ}放^チくる物^ナと見^セ。志^シう物^ナし給^タる。
神^{カミ}の御意^{コロ}を知^ルうら様^ド。強^ヒい^タ按^フう。ア^アを發音^ハの
初^ハ小^カ自然^{オノヅカラ}小^カ字^ウを含^ミくる音^コある故^ハ。於^オ阿^アハ。其^ハ字^ウを開^{ヒラ}

ニ リス ルリ リス ウ
ミケ ア リハ リス オ
ニサ リテ ル ルエ
ミエ リ
ミホ リス サ

ミタ リツ リス リモ
ミハ リツ リキ リチ
ミク リヌ リル リロ
ミツ リソ リユ リラ
ミカ リヲ リキ リネ

今 ^サ
 ト ^エ
 全 ^ホ
 コ ^レ
 ノ ^ケ
 ナ ^ス
 ウ ^ア

오 ^ヲ
 토 ^ユ
 토 ^タ
 토 ^ヰ
 토 ^ハ
 토 ^ツ
 토 ^ク
 토 ^メ
 토 ^カ
 토 ^ソ
 토 ^リ
 토 ^チ
 토 ^ム

○右神世字天思兼命所撰云。對馬國ト部。阿比留中務傳之。
 ○一本云。右日文者。日神勅思兼命所製也。筆法祕傳者。筆意。把筆運筆全假離合。廣文縮文。以上七條。ト部。家口傳有之。と。森川士義。が集とる中の一枚とを校合せ見て載せ。

泰と云ふと記されるとるは、決えて同族ある法し。然るを前小舉する日文の奥書小。中古所謂肥人書也。云々此字前小をいと信ぎとく思方正し哉。此頃もく思方は思ひ合を法き事あむ。有けぬ。其もは於此恐る草字もやがて上ある眞字比草書恐る。其由も第三小举る遺文北釋日本紀小。和字の興字問方る答の其一。師說大藏省御書中有肥人之書六七枚許。先帝於御書所令寫給其字皆用假名。或其字未明。或乃川等字明見之。若以彼可爲始歟。とるハ古史徵の開題記小言方ぬ如く。康保以前の私記セ說と通えどる。大の肥人書と云ふもぬ。と前小う北開題記字撰

横舉とる。但しニ枚とも。希く縦字も。希く小横よ作れる字も交れる。己が私ノ彼も此を縦の一脉小整とみ取れ。其見易くらむ事を思ひてあ。○此二軒の奥書を草書眞書二體小兼とる奥書か。大は眞字を前小舉する眞字と比較亦。彼も横小書き。此も縦小作る違ひのみ。全く同字か。然れど對馬國のト部阿比留氏姓家小傳方。天思兼命所撰といひ繼丸來教ること。實不然る法し。但し前小舉とるも。此一枚も。今小その家ノ持ふ年月を記さる。何頃まで持傳方又と云。こぞ知法のら矣。彼國のト部も。と數十家有しが。何れも其傳方とは一二家オラで。は存らばと聞れ。阿比留氏も。その絶て。今は一。二家中の一家。小を非ざる。彼國人小をしみて。み於比留と云し人と。相交れる由見えて。此人後々を西山順

きる頃までは肥國人の古く作れる和字ハグロモジ小。あまく乃川
などの漢字の交れある法し。と思方正しを上下カミシモ小舉
み字カラモジも残見て。近頃とく考ぬあり。其の謂イハ也。肥人
書ハシマシ。あもち今此書小著し傳ふは字等小て。乃川等字
明見ハルフ之とい牙る二字は。漢字小焉う矣。其をまた万葉集
を始矣。古書カタカタども小用ひ來れる乃川の二字は。元よ正漢
字小て。乃ナ音ある残ノ。小轉じ用ひある例にて
論も取く。川を川字を義訓カタカタ。尔用ひと正と見やみ。が。
但しあの川字の事ハル。旧くも今もくさぐ説ふ言トタケ。く
ども聞せれど。余は川字北義訓と思ひ定をみ。正適く肥
國人の書カケ。皇國字ヨウコモジ。それ小似ある。有しを見て。やく

ア。あく。漢字の乃川。あアと思方るがアなり。其を乃是此
小舉アゲ。とる草字ハル。ある字を。鶴岡、八幡宮小傳ハれ
は草字北日文ヒフヨを始矣。其餘小もア。とやうり書カリ。然れぞ
かの肥人之書ハも志カキ。書タム。漢字の乃字と思ひ錯
り。川を大れ法遺文ハツムと作ハス字あり。但タクし此を不タク。此字
彼肥人之書ハも志カキ。書タム。川字と思ひ紛ミラし。ある
ア。ア。近ごろ大竹政文カタハシマサムネが記せる物を見たる。其の中ハ
わ。其カクア。釈紀カタハシマサムネの古写本カタハシマサムネ。右の文を抜書しみ。を記せ
乃川カタハシマサムネとあるは。轉寫して。漢字の体ハタチ。訛カタハシマサムネれる。然る法し。然
きば釋紀カタハシマサムネ。肥人之書ハと。今著し傳ふる神字北草
書カケ。肥國人の書カケ。ある。こと疑ウタハ。上件の奥書ハ。中古

所謂肥人書也と云。あは中世乞書傳とある。此を肥國人の書あるも存しを見くる人は奥書あると更に疑れず物也。想ふ法し肥人の書といふ事も灼然字や。然るを仁和寺書目。肥人書五卷と標して一部の書名とせぬを信がとし。既小秋紀。六七枚許とあるをや。纏四十七音北字あきだ。大字小書あらむ。六七枚うを過法うら文。總てかの書目録には。かく信がとき漫事のうち交れること。開題記ふ。然るふ新井君美ぬしげ同文も往々論するを見ゆ。し。肥人書といふ人有れど。肥國今の肥前肥後等北國是あ。万葉集小肥人と書とある。コヘヒトを訓あれど。肥人書といふ。高麗國の書をや言ひ。今も通考小。右北釋紀の文と。仁和寺書目。肥人書と有を引きて。肥人書とハ。肥國人の書あといふ人有れど。肥國と。今も肥人書といふ。高麗國の書をや言ひ。今も

朝鮮小て用ふる文字。その體梵字の如く形る諺文と云ふあり。今そ北國不用ふる文字あること。古と正の俗かる法し。然らぞ高麗の世。其國不行はれし文字。我國小傳ハウ志を記せる書めざむも知らず。と言ふ。此といみじき非説あり。そは此説も。万葉集十一卷小寄物。陳思歌の處。小肥人の額髮結子。染木綿の染し心。我忘れ矣。とある歌。北肥人を常の印本。コヘヒトと假字付とあるを見て。言ふ。ある説あれど。此を非訓。北ヒトを訓法し。万葉集畧解。小。ウヘヒトと訓て。い方ある説もあれど。其も非説あれど。此も別不論。开る物。然る北此歌小立。早人の名小負ふ夜音。いちあ。

おゑく。吾^フが名^ナを謂^ハらせ嬪^{ツカ}と恃^マむ。と云、ゑ歌^{アモ}。早人^{トモ}と^モ薩摩^{サツマ}人の事^ヲ。或^ハ小^トかく並^{ハシ}ば載^セん。仁和寺書目^{レシテ}。肥人書^{ヒトシ}。薩人書^{サツジンシ}と並^{ハシ}ばて載^セん。以^テても、我^ガ肥國^{ヒトシノクニ}人の書^ヲあること論^{ハシメ}。殊^{ハシメ}小^ト肥人字高麗人^{コトヒトシ}と^モる事^ハは。あぐ^{ハシメ}万葉集の誤訓^{ヒカヨリ}を據^{ヨリ}と^モあち^ト外^{ハシメ}。正^{ハシメ}した證^{ヒカシ}あた事^ヲ。或^ハを^ヤ。よ^ソ此^ノも。紀^ヒ小^トいも^ヤる肥人^{ヒトシ}之^ノ書^ヲ。朝鮮^{チアシ}の諺文^ヒ。吾^ガ國^ノ傳^{ハシメ}ハ正^{ハシメ}しを記^セ。決^{ハシメ}て。今^ノいろは假^カ字^{ヒカシ}。北中^{ホウヂ}ある^ハのへ^ハ。や^ダて其^ノ和^{ハシメ}後^{ハシメ}字^ヲ。或^ハ由^{ヨリ}小^ト言^{ハシメ}れしも如^{ハシメ}何^ゾや。を^{ハシメ}て此^ノ主^ノの説^{ハシメ}。前^{ハシメ}小^ト説^ヲ。お^カれ^カる説^ヲ。多^{ハシメ}れ^カ。殊^{ハシメ}小^トかの諺文^ヒを^ヤいふ字^ヲ。此^ノ主^ノの書^ハ。其^ノ心^{して}見るべし。殊^{ハシメ}小^トかの諺文^ヒを^ヤいふ字^ヲ。皇國^{モミシ}字^ハ彼國^{ハシメ}。又^ハも舊^{フル}く傳^{ハシメ}ハ^モ遺^{ハシメ}れる^カ。を原^{モト}と爲^{ハシメ}して。

近く我^ガ應永^ノ頃^モ。小^ト彼國^ハ人^ビ北悉曇章^{ハシメ}小^ト附會^{ハシメ}して。杜撰^{ハシメ}れる字^ヲと^モ知^{ハシメ}れざる^カ。此^ノ主^ノの博識^ヲと^モては。大^キあ^{ハシメ}思^{ハシメ}ひ落^{ハシメ}志^{ハシメ}小^トぞ有^{ハシメ}り。其^ノは未^{ハシメ}伊藤長胤^{ハシメ}が三韓紀^{ハシメ}略^{ハシメ}乃方諺略^{ハシメ}といふ篇^{ハシメ}。小^ト洪荒^ノ世^モ以^テ識^{ハシメ}相付^{ハシメ}。人文既^{ハシメ}開^{ハシメ}各^{ハシメ}有^{ハシメ}文^ヒ篆^ヒ隸^ヒ旁^{ハシメ}行^{ハシメ}皆^{ハシメ}通^{ハシメ}其^ノ故^モ。西^{ハシメ}韓^{ハシメ}之^ノ人^ビ。自^{ハシメ}漢^{ハシメ}以來^{ハシメ}專^{ハシメ}用^{ハシメ}漢^{ハシメ}字^ヲ。篤胤^{ハシメ}云^{ハシメ}。大^キは長胤^{ハシメ}何^{ハシメ}小^ト正^{ハシメ}て説^{ハシメ}へる^カ。韓^{ハシメ}地^{ハシメ}小^トて漢^{ハシメ}字^ヲ用^{ハシメ}ひ^カる^カ。此^ノ乞^{ハシメ}ハ^モ後^{ハシメ}亦^{ハシメ}正^{ハシメ}た^カ。其^ノ由^{ハシメ}下^{ハシメ}云^{ハシメ}ふ^カを見て^{ハシメ}知^{ハシメ}。及^{ハシメ}明^{ハシメ}之中^{ハシメ}世^モ。初^{ハシメ}効^{ハシメ}悉曇半滿^{ハシメ}之^ノ製^{ハシメ}爲^{ハシメ}國^{ハシメ}字^ヲ。名^{ハシメ}曰^{ハシメ}諺文^ヒと記^{ハシメ}し。彼國^{ハシメ}の慵齋叢話^{ハシメ}といふ書^{ハシメ}。小^ト世宗設^{ハシメ}諺文廳^{ハシメ}命^{ハシメ}申^{ハシメ}字體依^{ハシメ}梵^{ハシメ}字^ヲ爲^{ハシメ}之^{ハシメ}。本國^{ハシメ}及^{ハシメ}諸國^{ハシメ}語音^{ハシメ}文字所^{ハシメ}不^{ハシメ}能^{ハシメ}記^{ハシメ}者^{ハシメ}悉^{ハシメ}通^{ハシメ}。

無礙。洪武正韻諸字亦皆以諺文書之。遂分五音而別之。曰牙舌脣齒喉。脣音有輕重之殊。舌音有正反之別。字亦有全清次清全濁不清不濁之差。雖無知婦人無不瞭然曉之。聖人創物之智有非凡力之所及也。といする文を引きて。慵齋叢話のこと。同書文籍彙の條。慵齋叢話十卷。共成文公所著と見えて。やがて朝鮮國の人北著せる書なり。予ハいよど其訓蒙字會ある。諺文字母といする條字。そ北隨書を見ぞ。訓蒙字會も。朝鮮の書にて。此書北事も。文籍彙小舉こと。訓蒙字會も。朝鮮の書にて。此書北事も。文籍彙崔世珍著。四字類聚。諺文及註。嘉靖六年序と。山川鳥獸草木器物顏色。毎字下加音狀。諺文及註。天地年序と。そ北字母まと造字の事を著せる訓蒙字會北文。左ノ舉る如し。

初聲終聲通用八字

ㄱ 其 尼 ㄴ 池 ㄷ 梨 ㄹ 眉 ㅂ 非 ㅅ 時 ㅇ 異

未 衣 两字只取本字之釋。俚語爲聲。其尼池梨眉非時異八音用於初聲。役隱未乙音邑衣疑八音用於終聲。

初聲獨用八字

ㅋ 治 ㅍ 皮 ㅊ 大齒△而 ㆁ 伊 古 尸

箕字亦取本字之釋。俚語爲聲。

中聲獨用十字

ㅏ 阿 卦 ㅓ 余 ㅗ 吾 ㅜ 要 ㅓ 牛 ㅓ 由 ㅓ 應
中聲不用
終聲
伊只

聲
思
初聲

初中聲合用作字例

가 가 거 ㄱ ㄱ ㅋ ㅋ ㅌ ㅌ ㅍ ㅍ ㅎ ㅎ

以「」爲初聲。以「ト」爲中聲。合「ト」爲字。則「」此家字音也。又以「」爲終聲。合「」爲字。則「」此各字音也。餘倣此。

初中終三聲合用作字例

止 叶 𩫎 𩫎 刀 古 柿 凸 甲 𩫎 皮 𩫎 江

「ヨ」下各音爲初聲。ト下各音爲中聲。作字。如「」例。作一百七十六字。以「」下七音爲終聲。作字。如「叶」至「江」七字。唯「」之初聲與「」字音俗呼相近。故俗用初聲。則皆用「」。

音若上字有「」音。終聲則下字必用「」音爲初聲也。「」字之音動鼻。作聲。「」字之音發爲喉中輕虛之聲而已。故初雖稍異。而大體相似也。漢音「」音。初聲或歸於尼。音或「」相混。無別。

此を屋代翁北藏による訓蒙字會字借覽て直了抄書しと
み取る。但し稀「ハ」字の誤りによる。有「を」だ。三韓紀略「サテ」。儲
お北説文を。慵齋叢話小。か北世宗が時小創免て製出
みどと言ふれども。朝鮮の今北王統の初祖を。李成桂と
洪武二十五年と云ふ。次に其子李芳遠といふが代立。此を太祖康獻王といふ。次に其子李禑といふ。立り。そ
を太宗恭定王といふ。次に其子李祹といふ。立り。そ
北元年は。皇國の應永二十六年不當也。漢土明代の永樂

十七年不當れり。此を世宗莊憲王と實を皇國字の舊く
いふ。此ゲ時小諺文を作れる由る也。實を皇國字の舊く
彼國不も傳ハリ存れる不原おきて作れ必由也。はが朝
鮮といふは師說の如く。いと古くは三韓の北不有し。一
小國北號あざしが後不三韓。高句麗。獮貊。沃沮などいふ
國いく哉混一。不爲志て。朝鮮とい方るうて。古不三韓也云
るも。今朝鮮の内北。南方半分ばう正歎め。三韓と。馬
の三ヶ不して。馬韓を。那モチ百濟あり。新羅を。弁韓の内
乃一國。高麗をもと。三韓とハ別不して。朝鮮獮貊ふどを
をどて。北方小國也。かくて後不ハ。其の三
國をさして。三韓と云えれど。本を然ら矣。以て今も右
北國等字悉を法て。朝鮮といふ。抑其の朝鮮北國也。皇國
子いと近紀蕃國不て。彼地不往來あざし事の始。字思ふ

小健速須佐之男命。高天原ミカ。天乃壁立モ極み廻ア坐
テ。新羅國不降ア到き給ひて。韓地の嶋モ。吾居はく欲せ
ぞと詔ひて。皇國不還ア渡りませぬ。いと古れど。此
時を彼地不。いはゞ人類も無アし頃の事とたゞやれ
ば。此はれきて。是ちア遙後不。神武天皇北倭國不入ア給
ふ時。小木國熊野北海中より暴風不遇ひ給方あり。御從
小坐せる三毛入野命。浪秀を踏て常世國不渡り給ひ。新
羅國不至ア坐て。その國王と成みまひ。此事委くハ古史
辨考と。神武天皇也。そ北御裔の次く不。彼處字治を
み。後不其裔也。皇國不還ア來ア。其を崇神天皇の御

予の參來て後の事を東國通鑑小ちわて考ふ候。此後
新羅乃始祖也。姓ハ朴。名モ赫居西といふ者小て漢宣
帝と云ひる王也。五鳳元年と云ひる年也。新羅を知
り始く。又由あ候。此も崇神天皇の四十一年小當れば。
日予の參來れる後を知れどと志て。時代もしく符す。
東國通鑑も。偽多き書あれど。かくて仲哀天皇始御世也。
も。此を信ある處く所思す。かくて仲哀天皇始御世也。
神の御誨小乞りて。神功皇后。新羅國を征伐み乃ひし
む。速小服奉也。百濟國。高麗國も次々小服ひ奉れる故
也。百濟國も日本府を建て。多く北官人を遣して。彼地を
治し。先給ひ。彼國も。人多く參渡也。來て仕奉す。

世小新羅國王北子天日槍といふが來れど。此を歎もち
其御裔あると。姓氏錄右京。皇別小新良貴彦波瀬武鷦
鷯草葺不合尊男稻飯命之後也。是於新良國即爲國主稻
飯命。出於新羅國王者祖と伝也。新羅國へ渡り坐るも。
を姓氏錄う。稻飯命といふるも。御兄弟の間も。實も三毛入野命があ
て。傳方誤れるか。此も例多きことあり。その時日
予の持來れる寶物。小振浪比禮。切浪比禮。振風比禮。切風
比禮。あと八種あひて。此も後小伊豆志北八前大神と齋
ゐる。いぞ神も志きは。彼三毛入野命の浪秀を踏て渡
り給ふ時。小持渡り給するを持還れどと聞也。小思ひ
合せて辯ふ法し。此事委くハ古史傳小註。それぞ。ちよ日
あくふも。大略を云のみぞ。けよ日

こと御紀ミ小委クシく見えとみアガ如シ。あ木ヒ巨コ細カある事ト古コトはシテ史傳シト小就クシて見ベシ。
ちア東國通鑑トウコクツーマン小シりて考フるル。百濟國ハルジヨウ小シ。開國カイクよア
其國字チコクジも無ナシ。近シ肖シ王ヲと云フ。方カタみアガ。まコ肖シ古コト王ヲと
十九年トシといふ年シ。始シ免シムて漢字カンジを用フ。西シ土トも晉シン簡文帝カンモンテイが咸
六年トシ仁德天皇ニントクノミコト。高麗國コラモリ小シ。小獸王シラヌイといふアガ。二
年トシといふ年シ。始シ末エて漢字カンジを用フ。安二年トシ小シ。西シ土トも晉孝武帝シンコウクラ。皇國
十年トシ不ハシ當ル。新羅國シンラ。法興王ハツキとい方アガ。元年トシと
いふ年シ。漢字カンジを用フ。始シある趣シテ。小シ見シムえどア。西シ土トは梁武
三年トシ。小シ仁德天皇ニントクノミコト。皇國コトコク小シ。帝シテ天監十
繼體天皇スルタケミコトの八年トシ不ハシ當ル。然れど應神天皇紀十五年トシの
下トロ。百濟國ハルジヨウ。阿直岐アヂギ王ヲ仁ヒ二人ツの博士ホクシを進シム。漢籍カンガフを

も貢タマフれる由ヨレ見シムえ。二十八年トシの下トロ。小シ高麗國コラモリ。ちり漢文カンモンの表
を上シムれ。事モノも見シムえ。これぞ。百濟高麗ハルジコラモリとも。既ハシ不ハシ漢文字
字シマツ傳シマツへても有リれど。未ハシ弘ヒロくハ用フひざ。正シしある。後アシ。但シ
も。既ハシく寺嶋氏シマツシマツ。和漢ワガン。而シテ彼ヒ地シマツ不ハシ。かく元モリと。國コト字シマツの
三ミツ文モジ。國コト會シマツ。不ハシも。い。子コト。正シし。而シテ彼ヒ地シマツ不ハシ。かく元モリと。國コト字シマツの
無ナシ。正シしうば。當昔服ツカミツコロヒ從シテ始シ。間ミツコロヒ。正シ。皇國文字コラモリモジ。故ハシ傳シマツ。方カタ賜タマフは
正シて用フひ。年シ。が。それ朝鮮コラモリの世宗セヨウ。時トキ。はシ。で。をろく存シ
傳シマツ。はシきむはシマツ。然アレ。も。有リべシ事モノ。正シ。彼ヒ地シマツも。元モリと。訓語シムグの
早ハシく。皇國字コラモリモジ。用フひ。習シム。ひ。然アカ。故ハシ。それ小原モリ。おきて。諺文
と。實ハシ。小シも。尤ハシ。有リ事モノ。小シざ。正シ。故ハシ。それ小原モリ。おきて。諺文
を製シムれること。更ハシ小シ疑ハシ。あき物ツバラカ。故ハシ。其シ字シマツ委曲シマツ。小論シマツ。はシ。よ
が。早ハシく。釋日本紀シハルニシ。肥人ヒト之シ書シ。とい。方カタ。該シマツ書シ。やシ。が。今ハシ傳シマツ

ふる日文あはあと。乃川等字明見之と説る字の正志く
存れるを以て灼然く。日文を本小て。諺文は末あるこせ。
釋紀字著せるト部兼方也。開題記小も記せぬ如く。龜山
院天皇の御世ニ花園院天皇の御世ニ又止まで北人
小て。釋紀在其年間小出來ニ。其小引ニ。私記。肥
人之書を古書と爲みれば。其いぞ古記書歎しこと知
ばく。其の私記を康保私記と爲らむ。諺文を製れ
アといふ。朝鮮の世宗が時を止む。四百六十年ばかりも
前か。其小既小古書と爲て。和字の始と爲べし。さ
方言を。やまと彼説を。私記の説あら矣。釋紀北説と

爲らむ。釋紀字記せる年を詳あらゆど。正安三年
小書寫北奥書ある。其年ニ。彼朝鮮の世宗が元年ハ。皇
國北應永二十六年小當れど。百十九年間あり。然れど。釋
紀小。肥人之書の事を記せぬ年ち。朝鮮小て諺文字作
きる年まで。其間二百年ばうともや有。此をもて日
文のいと古く。諺文のいみ後。又事ハ。更ノ論。い。ま
ま。諺文也。日文小原ぢきて。作れぬ字。上小引
出。初聲終聲通用八字北中ある「其」。尼。口。眉。へ時
は。古。れ。ま。く。小。い。や。正。く。傳。ハ。れ。止。て。池。を。正。く。む。」
み。ま。支。を。少。く。形。を。訛。止。傳。方。己。梨。ハ。正。く。ハ。コ。と。ある。を。

きを下レモ小レモし北付フキ。又は訛ヤリあヒ。予オシゲ集アハさる日文ヒ中カ小
 あるも、諺文イガニの訛ヤリ字受カムくる後ヒ人ヒのほうしらせる字ヒ。曰ヒ非ヒも日文ヒ小レモと合ハれる
 字ヒ。何ハ不忘メミてかく訛ヤリり傳ヒタツある。うクあらからむも知ベ
 爾ウラ。○異ヒ在ヒ日文ヒ了ヒて工ヒ小レモさるを。此クを疑ウタマく世宗
 が時ヒ小レモ改アラタえヒる歟ヒ。其クを彼國アツカ小レモ古ルく傳ヒタツるは。工ヒあヒ
 あこと。高麗國アツカヒ小レモ工ヒといふ錢ヒの
 背文ヒ。大ヒ北字ヒを鑄ツヅ付フクあるを思ヒふ偣スニし。此クを日文ヒの字ヒあ
 るをや。まは余オレ心ヒ著ツカべて在リれる。田明院タツメイ行智ヒツギ告ハシメ知ルら
 号ナ小レモて。ハセせヒくる歟ヒ。元祐ヒも漢國カムギ趙宋チヤウスン哲宗セツソンといする年ヨリら
 何ハされど。行智ヒツギ言ハシメふ。此クを宋の元祐錢ヒ小レモあらひて。高麗アツカ
 小レモて鑄ツヅるあらむと云ヒ。実ヒ然ルるに。宋の元祐ヒよ
 て朝鮮アツカヒの世宗セツソンが時ヒまで三百四十年ヒばク。工ヒ小レモやあらむ。

診ヒ已ヒ傳ヒタツ。又ヒを鑄ツヅ付フクある。中カ小レモ立ヒ字ヒを鑄ツヅ付フクる。皆ヒ日文ヒを
 工字ヒ。此ク字ヒあたをせ思ヒふ。而ヒれど。令ヒの諺イガニ。ちて日文ヒ北ヒ九ヒ父ヒ字ヒの中
 れる。○字ヒは。丁ヒ一ヒトヒ等ヒ北ヒ五ヒ母ヒ字ヒ小レモ配ハシメせて。丁ヒ一ヒ一ヒ一ヒ
 ヲの五子字ヒ小レモ用ヒタツふる字ヒあれど。諺文ヒ乃初終通用字ヒ北ヒ中
 小レモ有アハべたヒ。初聲獨用八字ヒの中カ不出ヒ。○伊ヒある。音ヒ
 を訛ヤリれる。比ヒみあらヒ。悉曇ヒ小レモ正ヒて。字ヒを製ハシメると言ヒ。
 悉曇ヒの理ヒ字ヒけヒ小レモ知ヒざる誤アヤリ。然ヒ亦ヒ初終通用字ヒ北
 中カ小レモ。○字ヒ無ナシて。五十音圖ヒ。ウラ平工ワ北行ヒを作ハシメき
 由ヒ取ヒきを。初終通用字ヒ。ウラ平工九字ヒ無ナシて。叶ヒハ然ル。
 とを引ヒ合ヒせ見ヒして。初終通用字ヒども小レモ。右ヒの如ヒき誤アヤリ。此ク理ヒ字ヒ辨ヒふ法ヒして。初終通用字ヒども小レモ。

有れど初聲不用ひ。うお其音を訛ふた事も。日文の古傳
ぞとく符方れど役隱未乙音邑衣凝あど比。終聲八音を
用ふは事ハ悉曇半滿の製小倣方る韓人のちかしら歎
ア。はと初聲獨用八字を別小作こゑも。杜撰あるこそ也。
言までセ乃支グ中少〇とすとも彼地ヲ古く傳ハれ候
皇國字ある。音を訛れア。其ハ〇字のこそは既に論
ア。字も。日文の叶字を下小舉ある。薩人書也と奥書あ
る遺文乃眞字小。古と作れ。社ニト傳ハれる遺文ども小。
○と書。又草書を傳。オ錯れる。此字の事也。又木第三
ふを見。さて中聲獨用十一字の中。ア。ト。ナ。上。ト。一。ナ。五。

字は正ノ日文の五母字。あれどト阿。一伊のみ本音を違
テ。交。十。於。上。吾。丁。牛。は。音を訛。又傳。ア。ア。ア。ア。ト。ヨ。ア。ア。
一。ア。六。字。も。例。北。杜撰。あれど論。ア。足。ラ。ビ。抑。カ。く。安
杜撰。ども。は。皇。國。ア。正。シ。キ。字。は。傳。ア。ア。死。年。を。重。祿。世
を。經。る。は。小。く。古。傳。の。用。格。字。失。ア。強。ア。其。字。小。原。も
た。悉。曇。章。を。附。會。志。て。字。找。製。ア。增。コ。エ。故。尔。か。く。事。痛。打
拙。支。物。ぞ。を。成。ハ。ク。む。諺。文。も。し。彼。世。宗。が。時。ア。創。免。て。作
れ。る。ア。庇。ム。ア。は。必。字。原。を。物。せ。で。は。え。有。ラ。然。態。ア。ア。其
モ。ラ。カ。モ。字。體。字。視。ア。不。決。め。て。字。原。あ。く。て。も。叶。ア。ヌ。文。字。原。
ア。其。あ。だ。ア。元。ア。傳。ア。カ。存。ア。文。字。小。原。ア。原。ア。支。ア。製。ア。あ

故あほをも思ふ法し。然れど謗文といふ名も舊よア其國比俗謗不用方る字。あほ由の名ふぞ有べた。或も原文書のあるも。由。あホ言はぐ。日文もし謗文小依て作れ。モレ事ある事あり。あホ言はぐ。日文もし謗文小依て作れ。モレ字あらはしかば。字音作字用例。或の恐らば彼謗文と同。モレ悉曇章と等しう。又法きり。大小異母あて事痛から。モレ上世の質朴ある風。小乞く符ひて字原の正したを更。モレも言は文字音製字いそ正。あく。謗文比謾。あるとは。一日小云法くも非ぞ。製字の正しきとハ。丁を縦とし母と爲。モレア。ス。フ。ツ。ル。ヌ。ク。ユ。ム。ウ。九音の尾聲小通し用ひて紛る。モレ又事取く。上一トの四画を縱とし母とあて。尾。ヘを横。モレ

やし父と爲て。フ。ホ。ヒ。ヘ。ハ。五音の首聲小通し用ひて錯。モレ
は。ホ。ヤ。取く。合。口。コ。レ。フ。エ。ロ。〇。比。ハ。画を。横とし父とあ。モレ
字音の正。あきとは。ウ。ヲ。ヰ。エ。ワ。ユ。ヨ。イ。エ。ヤ。比二行も。紛。モレ
は。あき事取く。正しく作ちて。オ。ヲ。イ。ヰ。乞く別立て。其所。モレ
屬のいと正。あきを以て言ふある。謗文小ち立て。製れる。モレ
物あらはしう。如斯く正。うらえや。其は。オ。ヲ。イ。ヰ。エ。エ。モレ
比差別を知れて。無用れる事の如く思方ある舊き事小。モレ
ア。七百年ばかり以來。殊不然有しを。近づろ契冲法師。モレ
が。明。免。こ。免。ち。カ。世の人も。此差別を正。を法き事を知。モレ
れぞ。日文もし契冲僧。此事を明。免。ざる以前。小。偽。正。作。モレ

きる恐らむ。是此差別も立まじく。よこオヲヒ所屬を
も。年久あく錯亂ア來れるを。此を吾師乃近頃明えられ
志事恐れば。日文そし我グ師說の世ア著れざる以前の
人の諺文アヒテ物せぬ恐らむ。は決末て錯ア亂れ
て有べき小いヤ正志丸をも思ふ。まし。おれら日文字の
非ざる由を知。ばき證の殊ア明ある物ぞ。後人の作れる
あハ總論。又辨ある說をも合せ考ふべし。かくれば新井
君美然しげ。肥人書を。朝鮮の諺文小やと言れし說の。い
ク小非說アラジやは。○ちて上件の奥書ア筆法祕傳者。
筆意。把筆。運筆。全假離合。廣文。縮文。以上七條ト部家口傳
有之とある條。アヒテ謂。アヒテ今此不著し難し。

